群像

〔中〕

堺屋太一

群像の世界〔中〕

堺屋太一

日本放送出版協会

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

峠の群像 (中)

定価一、〇〇〇円

昭和五十七年二月一日 第一刷発行

著者 堺屋太一

発行者 藤根井和夫

印刷 凸版印刷株式会社

製本 株式会社 石津製本所

発行所 日本放送出版協会

郵便番号一五〇

東京都渋谷区宇田川町四一一一

振替 東京一—四九七〇一

検印廃止

(落丁本・乱丁本はお取替いたします)

©1982 Taichi Sakaiya Printed in Japan

ISBN4-14-005101-9 C0393 ¥1000E

峠の群像

(中)

カバー・扉　村上　豊

装幀　土方弘克

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

第二部　光陰の渦……5
一　金銀改鋳……7
二　算勘の世……48
三　人と組織……82
四　華やぎの日々……111
五　市井の人々……153
六　亀　裂……209
七　頂の雲々……244
八　経済摩擦……286
九　転換期……322
十　下り坂……360

第二部　光陰の渦

一　金銀改鋳

(一)

「元禄」は華やかな時代である。

今日、日本の伝統文化といわれているものの大半が、この時代に大成した。特にその前半期は、平和な安定社会の中で経済が成長し、人々の暮しも概して向上した。貨幣経済が急速に浸透し、商品流通は増大し、専門技能を持つ職業が育ち、消費は華美になって行った。殊に、江戸や京・大坂などの大都会ではそれが著しい。

街行く女性の服装は日々に美しさを加え、派手な後結びの帯が普及した。食事は多彩で美味となり、松前の昆布や肥前の海産物がだし取りに使われ出した。灘の澄み酒が全国に出廻り、瀬戸内の白い細やかな塩が庶民の台所にも入り込んだ。

これに伴って、呉服屋は店を拡げ、廻船問屋は持ち船を増やし、材木商は急成長した。貨幣経済の発展に伴って両替商は大いに栄え、手形が普及した。政商たちは巨利を得、豪遊にそれを散じた。ために遊里は盛んとなり、独特のきらびやかな爛(ただ)れた文化を創った。芝居小屋は各地に生れ、茶会や歌仙がどこでも華やかに行われた。そしてそうした需要に応じるように、多くの分野で史上

に名をとどめる名人巨匠が輩出した。

造形美術の世界には、土佐派を再興した土佐光起や浮世絵の祖菱川師宣、風俗画の名人英一蝶、そして絵画から工芸・衣裳デザインにまで広範な活躍をした光琳・乾山の尾形兄弟らが出た。歌舞伎の舞台には、江戸の初代市川団十郎、京の初代坂田藤十郎らが現われ、荒事・和事の基礎を築いた。浄瑠璃界には不世出の名人竹本義太夫が出て、辰松八郎兵衛の人形遣いの技巧と相まって人気を集めた。

文学の面もまた華やかだ。浮世草子の巨匠井原西鶴、仮名草子の大家浅井了意、俳諧の巨人松尾芭蕉、そして日本史上最大の劇作家近松門左衛門らが元禄の世を彩った。

学術の方もこれらに劣らない。儒学者としては、京に伊藤仁斎、山崎闇斎がおり、九州からは貝原益軒が出た。一風変った儒者熊沢蕃山も元禄初期にはまだ生きていた。この時代にも政治上風俗上の理由で罰せられた学者・文化人は何人かいるが、のちの享保や天保の頃に比べるとはるかに自由な雰囲気があった。幕府の忌諱に触れて流罪となった熊沢蕃山や英一蝶はむしろ珍しい例である。

こうした時代を治める五代将軍綱吉の宮廷は、多彩な文化人によって飾られていた。能を好み儒学を溺愛したこの将軍の周囲には、それにふさわしい人材が侍っていたのである。

まず、儒学の面では、大学頭林鳳岡をはじめ、新井白石や室鳩巣を育てた木下順庵などがいたし、柳沢家の儒臣となった荻生徂徠もしばしば将軍の側に登場した。

和算術の巨峰関孝和も御納戸組頭として江戸城に控えていたし、地理学と土木水利の大家河村瑞賢もよく出入りした。自らの才覚と勇気で江戸有数の豪商となった河村瑞賢が、旗本に加えられる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

のは元禄十一年のことだが、その三十年も前から幕府の御用で航路開発や治水事業に当っている。

一風変った学者もいた。元の姓は安井、名は助左衛門、かつての号は算哲（さんてつ）。つまり囲碁家元の一つ安井家の長男で、この人自身も当時の最高段位八段に達した腕前である。しかし、将軍綱吉に仕えるのは碁才によってではない。この分野には、江戸時代を通じて最強の打ち手といわれる本因坊道策が現われ群雄を圧倒してしまっている。この人、二世安井算哲も本因坊道策に敗れて碁を捨てたのである。

碁を捨てた家元の長男は、姓を渋川、号を春海と改め、天文暦学に励み、それまで行われていた中国渡来の宣明暦が日本の天象と喰い違うことを指摘、水戸光圀や保科正之の後楯を得て改暦を行うことに成功した。将軍綱吉の就位から四年目の貞享元年（一六八四年）のことだ。渋川春海は、この功により幕府天文方に任じられ、その子孫も代々この職を継ぐことになる。改暦という歴史的大事件が、碁打ち上りの一学者の提案によって実現したというのも、この時代の文化性と将軍綱吉の学問好きの現われであろう。

しかし、こうしたきらびやかな文化の香る江戸城にも暗い陰が忍びよっている。幕府の財政が逼迫しつつあったことだ。そしてその面にも、将軍綱吉の宮廷は驚くべき天才を擁していた。その人物の名は荻原彦次郎重秀という。

荻原重秀は甲斐の人といわれ、最初は幕府勘定方の下役として入ったが、やがて頭角を顕わして昇進を重ね、綱吉治世の初期には早くも勘定組頭となり、貞享四年九月からは勘定差添役に就き五百五十石を受給するに至る。武士としてはごく低い身分から出発したこの男が、弱冠三十歳にして勘定奉行を補佐する要職に就いたのは、その才覚が並みのものでなかった証といえるだろう。今日

でいえば、国家公務員試験中級職合格で入省した短大卒が勤続二十年で大蔵省の主計局次長に任じられたような感じであろう。

だが、荻原重秀の異才は、単に計算上手とか記帳の名人というのではない。この男は、経済というものを全体として理解し、財政をもその一貫として把える理論的な頭脳を有していた。従って、荻原には、財政を経済政策として考える発想があった。十七世紀の末にこうした考えの持主が現われたのは誠に驚異的であり、当時の西欧の経済学に比べても数等進んでいる。もし、荻原重秀が、世の政治批判に曝されない立場にあって、その考えを文章に著わす暇と表現能力に恵まれていたとすれば、世界の経済学史に残る偉大な業績を生んだに違いない。

だが、実際の荻原重秀は生涯のほとんどを幕府官僚として過し、泥臭い現実政治の中で無理解な権力者たちにその才能を捧げ尽した。このため、この男に対する評価は、結果論的な政治批判と政敵による悪意に満ちた曲解に塗り潰されてしまう。このことは、荻原重秀とその時代の為政者の不幸であったばかりでなく、日本の経済学の発展にとっても大いなる不運であったといえる。

元禄時代の為政者ほど多くの誤解を受けている人々は、日本史の中でも珍しい。このことは、この時代の最も重要な政治課題である財政問題についてもいえる。

元禄時代の幕府の財政は非常に悪く、かつ時と共にますます悪くなって行く。しかし、その責任の大半は、この時代の為政者よりも前代の担当者が負うべきものであり、残りの多くは天災や不注意な失火者のせいである。

通説によれば、将軍綱吉とその取巻きたちは、「生類憐みの令」などの奇政と派手な寺社建立に

よって巨費を浪し、豊かであった幕府の財政を破綻させた上、貨幣改鋳などの悪政によってそれを補い、物価の急騰を招き庶民を苦しめた、とされている。しかし、これは事実のごく一部でしかない。実際は、綱吉が将軍位に就いた時、幕府の御金蔵は既に空っぽであり、財政の赤字体質は深く浸みわたっていたのである。

一つの王朝や政治体制の歴史を見ると、大抵、できた当初は資産が多く財源も豊富であり、権力者の生活も行政機構も簡素で支出は少ない。つまり、財政はいたって健全である。ところが、三代目か四代目の頃になると、支出が急増して財政難に陥ってしまう。中国の歴代王朝も、ヨーロッパや中東の王家も、近代革命後の各国政府も、戦後の日本も、みなこのパターンを繰り返している。

徳川幕府とて例外ではない。初代将軍徳川家康の頃、幕府の金庫は甚だ豊かであり、収入源も多かった。佐渡や生野などの金銀山からは多額の収益があったし、外国貿易による利益も巨額にのぼった。慶長十二年（一六〇七年）、家康が駿府に隠居するに当って、二代将軍秀忠に国防災害に備えるためとして与えた資金は、金三万枚・銀一万三千貫に達したという。それでもなお、家康自身の手元には膨大な金銀があったらしく、家康が死んだ元和二年（一六一六年）、さらに金九十三万両と銀五万貫の遺金があった。そのうち百数十万両は久能山の御蔵に収め、他は御三家に分けられた。二代将軍が引き継いだ金銀は合計二百万両以上にも達したわけだ。

二代将軍秀忠も、地味な性格でよく財を守りむしろ増した。寛永九年（一六三二年）正月、この将軍が死んだ時には、金三十万枚が残されていた。一枚が七両半（必ずしもそうとは限らないが）とすれば、二百二十五万両にもなる。このお陰で三代将軍家光は楽をした。この将軍は三代目らしい派手好みで、大いに財を散じた。日光東照宮の造営に五十七万両を費やしたほか、前後十一回を

数える日光社参や寛永十一年の上洛にも多額の金銀を使った。何しろ上洛の際には三十万人もの大行列を引き連れたというから費用も大変だ。それでも、幕府の財政はなお健全だった。それが決定的に悪くなったのは四代将軍家綱の時代である。

まず、この将軍の時代には、明暦の大火（明暦三年＝一六五七年）があり、江戸城の天守閣が焼け落ち、その下にあった奥金蔵の大量の金銀が溶解して地中に浸み込んでしまったという。大火後の江戸城の再建には九十三万両の金と米六万七千石を要したほか、町家や大名・旗本の屋敷再建にも下賜金や貸付金を相当に使った。その上、翌万治元年にもまた大火があり、同様の出費がかさんだ。

しかし、財政悪化の最大の理由は、こうした災害よりも、日常の支出の増加と財政収入の逓減の方にある。家康・秀忠の頃には、戦国の時代そのままに何事も地味で、武士たちもよく働いた。ところが、家光・家綱の代になると生活は派手になり機構は拡大した。江戸城内でも大抵の仕事は出入りの商人や雇い人夫にやらせて、武士たちは監督するだけとなり、やがてはそれすらも形式化してしまう。このため幕府は、一方には何の働きもしない旗本・御家人を大量に抱えながら、他方では巨額の委託費・人夫賃を出さねばならなくなった。今日でも、事業を外部の民間業者に委託発注しながら役所の公務員は整理もされず、かえって発注監督の部課長ポストが増えるという例があるが、徳川幕府にも同じことが起ったのである。

これに加えて、江戸の拡大と貨幣経済の浸透による生活費の高騰があった。この時代に生きた荻生徂徠は、江戸の生活を「旅宿の境界（きょうがい）」といっている。人口百万人を数えたこの大都会では宿屋暮し同様に菜葉一枚・草鞋（わらじ）一足をも金銭で買わねばならないという意味だ。当然、この大消費地の

需要を当てにして諸物を生産する専業者が現われ、それを商う問屋や商店が生れる。勿論、それらは素人造りの自給品より高級であり高価だ。勢い江戸の庶民は贅沢にならざるを得ず、それがまた上層階級の消費をも派手にした。

貨幣経済の進展で財を得た富商が豪奢を誇れば、大名・旗本もそれに倣い、江戸城の大奥の女房たちも競い合う。成長性の乏しい農地から上る年貢に依存する武士階級が、貨幣経済の江戸で暮せば貧困化するのは当り前だ。幕府も大名も例外ではあり得ない。

窮乏の時期からいえば、幕府よりも大名や旗本たちの方が早い。このため幕府は、寛文五年（一六六五年）頃から、困窮を訴える親藩や旗本にしばしば金銭を貸与せねばならなくなる。四代将軍家綱の次弟で甲府宰相といわれた綱重なども再三幕府に借金を申し込み、大老酒井雅楽頭（うたのかみ）忠清に断られたりしている。そしてそれがまた、幕府の財政悪化を助長することにもなった。

一方、幕府の収入が減っていたことも見逃せない。幕府の財源には、全国に散ばる六百万石の天領からの年貢や冥加金のほかに、鉱山収入や貿易利益のあったことは前述した。ところが、家康・秀忠時代には大きな収入源となっていた鉱山と貿易が、家光のころから徐々に減り出し、綱吉が就位する頃にはごく僅かになってしまう。

日本の金銀山の多くは戦国時代から幕初にかけて開かれたが、さしたる技術進歩もないままに半世紀以上も掘り続けたため資源は枯渇し鉱道は深くなり湧水の障害に直面。寛文年間には佐渡の金山・生野の銀山など数ケ所を残すのみで、他は閉山されるか銅のみを生産するようになってしまう。これでは幕府の鉱山収入が激減するのも当然だ。元禄時代は資源不足時代だったのである。

海外貿易の方はもっと困った問題を抱え込んでいた。戦国時代以来、日本の海外貿易は生糸など

の消費財を輸入して金銀などの貨幣用金属を輸出する形を採って来た。このため、日本から金銀が大量に流出した。一説によると慶長から宝永に至る百年余の間に金の四分の一・銀の四分の三が海外に流れ出してしまったといわれている。

この結果、天和・貞享の頃になると、日本は通貨不足に陥り、経済成長の重大な抑制要因となり出した。幕府が、海外貿易を長崎出島に限る規制を設けた主たる理由はこれである。それでもなお、長崎出島から流出する金は多く、幕府は大坂の両替商に命じて小判を買い集めさせていた。この小判買上げ、つまり銀や銭を小判に替える御用命に預った者が、いわゆる大坂十人両替であることは上巻で述べた通りである。

幕府は、貞享二年、金銀の不足を救うためにさらに貿易制限を強化し、年間の貿易貨物高を唐船は銀六千貫、オランダ船は同三千貫に規制、なるべく代価は銅で支払うようにした。この時期でも銅だけは生産が豊富だったからだ。こんな有様だから、海外貿易からの収益も家康・秀忠の時代に遠く及ばなかったのも当然である。

支出の増加と収入の減少、それに災害復興の臨時支出が重なったのだから、幕府の御金蔵金もどんどん減り、将軍綱吉が位に就いた頃にはほとんど空っぽに近い状態になっていた。このため綱吉は、恒例の日光社参さえ財政上の理由で行けなかったほどである。

将軍位に就いた綱吉にとって、第一の急務は財政再建だった。彼は就位直後、勝手方老中や勘定吟味役を置いて代官らの不正を厳しく取り締り、倹約を奨励した。将軍自身もその範を垂れるべく行動した。それを象徴するのが巨船安宅丸の廃棄である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com